「東條さま、初美さま、……ドリンクをお持ちしました」
ルルシアさんが、お盆に乗せたコップをテーブルに置いた。
「あ、ありがとう……」
「ありがとう、ございます」
軽く頭を下げて礼を言う。背もたれから身を起こし、テーブルの方へと……。東條さんと繋いでいた手はいつの間にか離れていた。
「んっ……」
露出した太ももがソファーで蠢くと、自分がまき散らした愛液が触れて冷たい。座面の部分もひたひたで、まるでお漏らししたみたい。革製だから愛液をほとんど吸収せず、水たまりみたいになっている。僕と東條さんの、二人分の水たまり。
全身も汗をかいているので、革が肌にくっついて気持ち悪い。
「お二人とも、お飲み物を召し上がる前に、こちらでお身体をお拭きください」
ソファー脇にさり気なく用意されたバスタオル。衣津さんに用意したドリンクをテーブルに置いたルルシアさんが、それを拾い上げて僕たちに渡した。
「ありがとうございます」
また軽く頭を下げて受け取る。東條さんも同じように……。ほとんど濡れていない上半身を軽く拭いてから、そのあとに下半身。太ももを拭く。お尻とかは立ち上がらないと無理なので、ゆっくりと足に力を入れる。絶頂の余韻でまだ膝がガクガクしているけど、気合いで立ち上がる。
僕の自重で生まれていた水たまりが、平面になったことで東條さんの方に行ってしまった。
「……冷たっ」
「あっ、ごめんなさいっ！」
慌ててタオルケットで水たまりを拭こうと……。
「お掃除は私がやりますのでお気になさらずに。それよりもお身体を拭いて下さい。そのままではお風邪をひいてしまいますから」
ルルシアさんが制した。良く見ればバスタオルが何枚も重なっている箱の向こうに、布巾や洗剤などが入ったケースが置いてある。
僕たちが汚すことを見越していたような準備の良さ。……予想通りになって恥ずかしい。
「……東條さん、ごめんなさい」
「……いえ、大丈夫よ」
東條さんは上気した表情のまま首を横に振った。そして同じく上半身を拭いて、太ももを拭いて、立ち上がって……。
――　ポトポトポト　――
座面が完全に平らになったことで、僕たちの愛液がソファーから滴り落ちる。後方に流れて

いったものは背もたれと座面のあいだに……。あれを掃除するのは大変そう。
ルルシアさんに申し訳ない気持ちが……。
「……ふふ」
だけど当のルルシアさんはそんな僕の視線に対し、いつもの艶然とした笑みを返してくる。いつまでも目を合わせていては失礼だと思って、視線を俯かせて身体を拭き始める。
太ももや股間部分、お尻などを拭く。その際にちょっと足を移動させると、絨毯が濡れていることにも気付く。あれだけ盛大に潮を吹けば、そうなるのは当たり前で……。
ここでもルルシアさんに申し訳ない気持ちになるし、そもそもお金持ちの絨毯を汚してしまったという恐ろしさも去来してくる。何十万円もしそうだし……。
「拭き終わりましたか？　それではタオルはこちらへ」
僕たちの濡れたバスタオルを嫌悪感なく回収する。
「お飲み物をどうぞ」
ソファーから離れた位置にあるテーブルに目線を移す。すでに衣津さんが自分の分を持っていた。さらにいつの間にか上着を脱いで全裸になっていた。僕たちの体液が掛かったから脱いだみたいだ。……相変わらずの毛むくじゃらでメタボな体形。そしてとても大きな身体。
それに見劣りしない、そそり立つアソコ。僕たち二人の痴態に興奮したらしい、中年太りしたお腹に完全にくっついちゃってる。……何度見ても怖いぐらいに凄い。
「いただくわ」
視線を衣津さんから逸らし、東條さんがコップを手に持つ。
「い、いただきます」
僕もすぐにコップを持つ。意識すると結構喉が渇いていたことに気付く。美味しそうな、白く半透明な液体に口をつける。とてもひんやりしていて、喉から食道に流れていくのがハッキリと感じられる。何度も喉を鳴らしてあっという間に飲み干す。
「お代わりは要りますか？」
ルルシアさんが聞いてきた。
厚かましいかと思ったけど、これからいつまでエッチをされるのか分からないし、その時に言いだせる勇気もないから、お願いすることにした。これだけでルルシアさんも衣津さんも僕を『図々しいヤツだ』なんて思ったりしない、っていう確信と、安心感もあった。
「畏まりました。……東條さまと社長は？」
「私もいただくわ」
「私はもう良いよ」
「畏まりました。それでは……」
三つのコップをお盆に乗せてキッチンへと向かう。
「二人とも、これからもたくさん汗をかくから、水分は多めに取っておいて損はないよ」

衣津さんは穏やかな声でそう言うと、静かに歩み寄ってきて僕の隣に立つ。そしておもむろに僕の肩を抱くように手を回し、胸を揉んできた。
「あ、んっ……」
左の胸が、大きな手のひらによってフニュリと歪む。
「紗夕里くんもこっちに……」
「……」
無言のまま彼女も近づいてくる。頬の上気はまだ取れていない。
「そろそろ本番が始まるから上も脱ごうか。セックスの時は、肌と肌が密着している方が気持ち良いしな」
僕の胸を揉みながら、東條さんの上着に手を掛ける。それに促される前に、彼女はあっさり脱いでしまった。これ以上、恥辱を与えられたくないと思ったのか……。ブラジャーも外して完全なる全裸に……。初めて見る彼女の全貌は凄いの一言。女神さまそのものの肢体。
「最高だねぇ。……さぁ来なさい」
僕の隣に並ばされ、片手で胸を揉まれる。
「「……んっ」」
両手に花というか、胸というか……。さらに衣津さんは腰を動かし、僕のお尻や東條さんのお尻に、その凶悪なものを擦りつけてくる。まるでマーキングするみたいに……。
程なくこれがお前たちの膣（なか）に入るんだぞ、と示すみたいに。
「……ぅぅ」
その生暖かくも強大な存在を押し付けられ、羞恥と恐怖に包まれる。悲しいかなその中には、まごうことなき悦びも生じていて、吐息となって漏れてくる。
グニュン、グニュンとお尻の肉を押しつぶし、腰をなで回す。
「ぁ……、ぁ、ぁ」
「お待たせしました。追加のドリンクです」
ルルシアさんが当然のようにこの光景を受け入れ、僕たちにコップを渡す。受け取ると笑みを浮かべながらすぐに下がって、掃除用具を取り出し、布巾と洗剤を持った。
まずは目に見える水分を拭き取ってから、洗剤を染み込ませて綺麗にするみたいだ。
自分の出したものを目の前で拭かれるのが恥ずかしくて、目を逸らしてコップのジュースを飲む。左胸が大きな手に包まれ、蠕動運動みたいな緩やかな蠢きによって揉まれている。安心するような心地よさと、性的な快感が広がっている。お尻にはまだ硬いアレを押し付けられている。……せっかくタオルで拭いたのに、内腿を愛液が滑り落ちる。
「あぁ、これからこの二人に好きなだけ挿入出来るのか……」
しみじみと言いながら腰を押し付けてくる。胸も乳首を潰すみたいにキュゥゥって……。
「「……んぅ」」

二人同時だったみたい。……幸い、嚥下し終わってるあとだから咽たりはしなかった。そういう時を狙っていたんだと思うけど。
次に不意打ちを食らうとコップを落としそうだったので、二、三口で全てを飲み干す。
「コップはテーブルに置いて下さいね」
後ろに目でもあるのか、ドンピシャなタイミングでルルシアさんが言う。衣津さんが察して身体を離してくれたので、テーブルに屈んでコップを置く。東條さんもクイッと飲み干してテーブルに置いた。
「さぁ、寝室に行こうか」
すぐにさっきと同じ体勢になり、背中から回した手で胸を揉む。歩きづらさに構わず、手のひらの開閉で胸の感触を堪能しながら、エスコートするみたいに寝室へと僕らを誘う。
大きなベッドと、天井に大きな鏡のある部屋。他にはテレビと観葉植物と……。
初めての夜に、気を失うまで衣津さんと混じり合った部屋。
今日もここであの時みたいに……。
「紗夕里くん、ベッドで四つん這いになって」
「……分かったわ」
「おっと、その前に」
大人しく従ってベッドに歩み寄ろうとする東條さんを引き留めて、唇にキスをした。そういうさり気ないところでも所有欲を満たすというか、とにかくキスが好きというか。
僕としては東條さんみたいな人がこんなオジサンとキスをしてるのを見ると悲しくなる。
もっと爽やかな好青年みたいな人だったら良いけど、こんな……。しかも東條さんが年上好きなら分かるけど、無理やり中年のオジサンと契約させられているわけだから……。
僕とだったらお似合いだったりするのかなぁ……。無理か。
――ンチュ……　チュプ、……レロ　――
少しのあいだ、舌を絡め合うキスが続く。そのあいだでも、僕の胸は優しく揉まれ、空いている手は東條さんのお尻にいっている。……豪華過ぎる。
「んふぅ、……もう良いよ」
唇を離し、ベッドへと向かわせる。東條さんは無言でベッドに膝を立て、中心部分まで進んで四つん這いの体勢になった。
恥ずかしい姿を散々見せたので吹っ切れたのか、堂々と体勢を維持する。
……凄く男らしい。それとも何も考えないようにしているのか……。
ただ東條さんの思惑は別にして、その姿はとても綺麗でエロティックだ。
秘書さんとかキャリアウーマンみたいな美女が、裸になって犬みたいに四つん這いで待っているなんて、扇情的以外の何物でもない。しかも身体を俯かせているから、胸が重力で凄いことになっている。張りがあって垂れた感じはしないけど、Hカップのその迫力たるや……。

あれに触れたらどれだけ気持ち良いんだろう。
「蒼くん……、私たちも行こう」
「……はい」
何をされるのか分からないけど、頷いて歩き出す。ベッドに膝を立てて前へ進む。思わず真ん中にジャンプしてボフっ！　ってやりたくなる感触だけど、今は人がいるし、そもそも他人の家だから無理。
――　ギシギシッ　――
ベッドが音を立てて軋む。
僕や東條さんぐらいなら鷹揚に受け入れてくれるベッドも、衣津さんの巨体には音を上げたみたいで、重厚な音を響かせる。怪獣みたいな迫力で、衣津さんは東條さんのお尻のほうに向かった。
……何をするのか、ようやく察しがついた。
「ふぅぅ、久しぶりの紗夕里マンコか。胸が高鳴るな」
目の前のお尻を両手で無遠慮に撫でまわす。
「んっ……」
「ほら蒼くん、これが紗夕里マンコだよ。色素沈着のないドピンクな美マンだと思わないかい？　小陰唇も慎ましく閉じて愛らしいし……。私が手を付けるまでオナニーさえほとんどしてなかったようだよ。奈菜美くんと貝合わせもしていなかったのだったかな？　ふふふ」
アソコに手を添えて静かに割り開く。その瞬間、東條さんの背中が震えた。
「どうだい？　エロくて綺麗なマンコだろ？」
「……は、はい」
一瞬の葛藤のすえ、僕は答えた。その瞬間にも彼女の身体は震える。……だけどここで無言だったら、肯定していないっていうことになるし。
でも僕なんかがそんな感想を言ってしまったら、嫌いに思われてしまう可能性もあって。
どっちが正解なんだろう。
「そしてこっちが尿道で、クリトリスで……、これがケツ穴だ。美味そうだろ？」
「……」
うぅ、……これは完全に正解が分かんないよぉ。
「ククク、まあそれはそれとして、肝心の膣（なか）も最高に気持ち良くてね。男を寄せ付けない澄ました性格のくせに、マンコは甘々。寂しがるようにキツく締め付け、トロトロに甘えて蜜を出して蠢く。極上の感触でチンポを扱きあげる。こんな名器を２０過ぎて一回も使ってこなかったんだから酷いものだ。犯罪だよ。この身体を眺めるだけで味わえなかった周りの男どもは、狂おしいほど悶々としただろうなぁ」
「……」

そ、それはまあ、見るからにモテそうだし東條さん……。僕ももし東條さんが同級生だったり友達だったりしたら、きっと凄いドキドキすると思う。
高嶺の花過ぎて告白する勇気なんて絶対に出ないだろうけど。
「まあその身持ちの硬さゆえ、私が初めての男として紗夕里マンコを味わえたんだけどね。……あの時の悦びと言ったら、凄まじかったなぁ」
その時を思い出すように述懐する。身体にも感触が去来したのか、アソコがビクン！　と脈打った。……え、エグい。
「ああ、もちろん蒼くんのマンコも最高だからね？」
フォローするように僕の頭を撫でる。
でも、そんなついでみたいに……。だったらどうして僕が最初じゃないんだろうって思う。
契約する時に凄く気に入ったって言って、今までで一番興味のある子みたいに言ってくれたのに……。今は二番手だし……。それはまあ、東條さんみたいな綺麗な人に、僕なんかが勝てるわけないけど……。それに衣津さんの一番になりたいとか思ってるわけじゃないし、むしろ興味を失ってくれてる方が有難いけど……。
でも今の状態は明らかに二番手だし……。そんな言葉は信じられないよ……。
「二人のマンコを今日はたくさん堪能させてもらうよ。それに契約期間中に使いすぎて穢れたりしないようルルシアに治療させるから。君たちはセックスに馴染みながらも常に美マンを保てる」
「「……」」
エッチをするとアソコって汚くなるの？　最初から最後まで形とか決まってるのかと思った。
まあ、衣津さんのこの凶悪なモノを何回も受け入れていたら、形だって変わってしまうのかもしれない。
「蒼くん……、私のチンポを紗夕里くんのマンコに入れてくれるかい？」
「……えっ？」
「君も後学のために覚えておいて損はないだろう？」
「……」
「……ほら」
衣津さんが僕の手を掴んで、アレのところに誘導する。太くて長いそれを無理やり握らされる。生暖かくてギンギンに硬くて……。でも独特の柔らかさが残っていて……。
先の丸い部分と棒の部分の段差がえげつないほどある。百貨店で何万円もしそうな立派なキノコみたいな形。……ぅぅ、お腹が熱くなってきた。
そんな想像で興奮してしまう自分が馬鹿みたい。
「……頼むよ」
戸惑う僕を促してくる。東條さんのぴったり閉じているそこを指で勝手に開いて、挿入しや

すいように入り口を明らかにし、誘導する。生々しく濡れそぼっているそこは、綺麗なピンク色で、その奥にひそむ柔らかさを想起させる艶めかしさがあって……。
何から何まで綺麗でエッチな人なんだな、東條さんって。……そう強く思う。
そしてここまでされてはどうしようもないので、上に反ろうとギンギン蠢いている衣津さんのアレをちゃんと持って、多分そうだと思われる穴の前に導いていく。
「蒼くん、私のチンポがけっして落とせないはずだった美女マンコに凱旋する瞬間を見ていてくれるかい？」
「……」
ホント、最低……、この人。
ここは無言でも良いと判断したので、それを貫く。
「ちゃんと押さえていてくれよ？」
気にした様子もなく衣津さんは、ゆっくりと腰をせり出させてきた。
――　クニュン　――
「んっ……」
東條さんの身体が震え、声が漏れる。
衣津さんの先端とキスするみたいに、小さな膣口が接触する。
――　クニュニュ、ニュルンっ　――
うわぁ、……亀頭が膣（なか）にめり込んでいく。……というか東條さんのそこが艶めかしく飲み込んでいったという感じ。キツイながらも苦も無く衣津さんを丸呑みしていくみたい……。僕のときもこんな感じなのかな？
――　ニュプ、ニュプ、ニュププ……　――
逞しいアレがどんどん入っていく。
「くぅぅぅ、ぅぅ、……ぁぁぁ」
歯を食いしばっても漏れ出てくる東條さんの可愛らしい声。その嬌声に興奮するとともに思わず感情移入してしまう。
衣津さんのモノが入ってくる感覚は僕も痛いほど分かっている。
異物が身体のなかに入り、熱さと圧迫感が全身を溶かしていく感覚。
自分の身体意識が支配している部分に、まったく関係ない他者のものが侵入し、身体の一部として認識される恍惚感。
異物であるはずの存在と、一体化する不思議な幸福感。
「ふぅ……、では動くよ」
――　パン、……パン、……パン　――
リズミカルに衣津さんが動き出す。
「んっ、……ぅん、……んん！」

侵入され、満たされ、引き抜かれ……、侵入され、満たされ、引き抜かれ……。
繰り返される刺激、明滅する悦び。力強い存在に身も心も征服される被虐感。
――パン、パン、パン、パン……――
「んっ、うっ、っ、……んっ、うっ」
そういった感情をいま、東條さんが多少なりとも抱いているだろうことが、僕には分かる。
生理的な嫌悪感を抱いていても、どうしようもなく湧き上がる快感を、僕も散々、この人に与えられたから……。
――パン、パン、パン、パン……――
――ギシッ、ギシッ、ギシッ、ギシッ――
綺麗なお尻に腰を打ち付ける音。それに合わせるようにベッドが軋む音。
「あんっ、……っ、やっ、……あっ、……あっ、あっ、あっ」
絶世の美女の可憐な喘ぎ声と重なる。
挿入後の最初の数回は、ギリギリまで入れて、ギリギリまで戻すというのをやっていたけど、すぐに我慢できなくなったのか、衣津さんは小刻みな抽送に切り替えていた。
お尻をがっちり掴んで、東條さんの膣（なか）の感触を効率よく味わうようなスピードで腰を動かしている。きっと凄く気持ち良いんだろう。
「蒼くん……、キス」
傍らに侍る僕の背に手を回しながら、衣津さんが優しく呟く。
「……は、はい」
懐に入るみたいに寄り添ったあと、顔を上向けて唇を押しつける。
――パン、パン、パン、パン……――
腰を動かしながらだから、顔が揺れてキスがしづらい。だけどその揺らぎが唇の感触をより強く印象付ける形になる。さらに唇同士が離れないように舌を強く絡ませ合う。
――パン、パン、パン、パン……――
――ンチュ、……レロレロ、ピチャ――
「んっ、うっ、うっ、……ん、あんっ」
「んっ、ぅん、……ぁむ、……んっ」
「んふむぅ……」
貫かれる東條さんの嬌声と、キスで溶かされる僕の声。
それらを甘受する衣津さんの声。
僕の背中に回した手は、いつの間にか下に伸びてお尻を触り、鷲掴むようにして感触を堪能している。
「んっ、……んんぅ」
肌が粟立つようなゾクゾクする快感。キスの快感と相乗効果で僕を追い詰めていく。

しかも身体の正面は衣津さんと密着していて、大きな身体に包まれる温もりが襲ってくる。
胸が潰れ、乳首が擦れて気持ちが良い。
――　パン、パン、パン、パン、パン……　――
「あっ、あっ、っ、ん、あっ……」
東條さんの可愛い声。それに連動して動く衣津さんと密着していることで、僕まで一緒になって東條さんを犯しているような気持ちになってしまう。
自転車に乗っている時、タイヤの先までが自分の身体意識の一部になってしまったような感覚。衣津さんと深く繋がることで、この人が腰を動かす衝撃や、お尻を打ち据えるときの東條さんの抵抗感が、まるで僕の物みたいになった気がしてくる。
「イッ、……く」
東條さんが悲しそうに言って、背中を弓なりにしならせた。
衣津さんとの感覚同化から、東條さんへの感覚同化へと変化する。後ろから貫かれてイカされる快感。獣みたいな体勢でイってしまうことの悲しさ。
同時に衣津さんとの感覚同化の感じも残っていて、東條さんを征服した優越感みたいなものが、ほんの少しだけ沸き起こってしまった。
僕は何もしてないし、そもそも僕自身が衣津さんの奴隷みたいなものだから、優越感なんておこがましいんだけど……。
「おっ、……ぉぉぉぉ、……良い締め付けだ。……キクなぁぁ」
キスをやめて、嬉しそうに呟いている。目を細めて顎を上げて……。本当に気持ちよさそう。
さらに僕のお尻を揉むのも忘れないで、身体を密着させて僕の胸を脇腹で潰すように……。
絶頂の余韻で痙攣している東條さんの、ガクガク震えている太ももを撫で擦って……。
とにかく貪欲に僕たちの身体を味わい、自分の快感に繋げようとしているのが見て取れた。
「んんむぅ……、今日は少し余裕がないなぁ。この組み合わせはかなり強力ということか……」
流れてくる刺激が強すぎるのか、眉根を寄せて困ったような顔をする衣津さん。なんか珍しくて新鮮。そして最悪なことに、そんな表情がちょっと可愛いって思ってしまった。
今日一番の最悪な感情。
「一度、出しておくか……。蒼くん、もう一度キスだ」
「は、はいっ……」
急に視線を向けられ、変な気持ちを見透かされたような気がして慌てて返事をする。
そしてすぐに顔を上向けて唇を寄せる。
「……んっ」
舌が口内に入ってきたので、僕も応じてそれに絡める。
――　ピチャ、ピチャ、……レロレロ、レロレロ　――
音が響き渡る。

もちろんお尻を撫でる手はそのままに……。ただ珍しくアソコは触ってこないので、ちょっとだけ物足りない気もしてしまう。

――　……パン、……パン、パン、パンパンパン　――

抽送が開始された。

「おっ、あっ、……あっ、あっ、あっ」

絶頂の余韻に震えていた東條さんが、また声を上げる。もう少し休ませてあげた方が……。

イッたあと、すぐに動かれるのは気持ち良すぎて辛いから……。

――　パンパンパンパン、パンパンパンパン！　――

だけど今の衣津さんにはそういう配慮はないらしい。自分が気持ち良くなることだけに全神経を傾けているみたい。

「んむぅ、ふぅ、……ぅぉぉ」

キスを通して伝わる声にも、自分だけの快感を追及する色が混ざっている。

僕の身体と唇、舌……、東條さんの膣（なか）、お尻、太ももを、ただただ楽しんでいる。

――　パンパン、パンパン、パンパン、パンパン！　――

「あんっ、あんっ、あんっ、あんっ」

そしてその余裕のない激しさによって、東條さんの嬌声はあからさまになる。羞恥心を忘れたような甘い声。こんな可愛い声を出されたら、普通の男はホント呆気ないと思う。

「んぐぅ……、んんむ、……んぉぉ、ぉぉぉぉ！」

少しのあいだ、ラストスパートみたいな時間が続いたあと、衣津さんは切羽詰まったような震える声を、喉の奥からこみ上げさせた。

それは同時に精子がこみ上げてくるのと連動していたんだと思う。

何度か強く腰を打ち付けたあと、

「んぐぉぅぅぅぅ！」

――　グゥン！　――

一際強く腰を押し付けて、その状態で痙攣しだした。

「おぐっ……、ぐっぅぅぅ！　……うぐぅぅぅ」

ドクン、ドクンと放出している音が聞こえてきそうなほど、気持ちよさげな衣津さんの痙攣。

「うっ、……熱っ、……い、イク、……イック！　ぅ！　……っ」

東條さんも、その波が波及したかのように強く痙攣する。

……ああ、あのお腹の熱さか。……アレは確かに耐えるのは無理。お腹にある快感の神経にドロドロとした液体を叩きつけられ、ネットリ付着させられるような感覚。

あの不潔感と背徳感の混ざり合った快感は、本当に凄い……。

二人とも凄まじい快感の渦中にいるようで、仲良く痙攣している。

衣津さんは痙攣しながら僕のことを片手で強く抱きしめてくる。その力の入れ具合からも、

凄まじい快感に包まれていることが伝わってくる。
直前まで蠢いていた舌は、放出の恍惚感に心を奪われているせいか、僕の口内で硬直したまま……。何かしなきゃ、と思ったので軽く舌を絡めて吸ってあげると、
「んむぉぉ……」
嬉しそうに呻いて震えた。
――ビクン！　ビクン！　ビクン！　――
衣津さんのその震えに合わせて、あの熱くてドロドロした精子の残りが、勢いを取り戻して放出されたようだ。
「おっ、……ぅ、……ぁっ、……あっ……」
弱まっていた東條さんの痙攣が激しさを取り戻し、嬌声も強くなる。
僕はただ黙ってキスをしながら、大きな身体に抱きすくめられて……。二人が落ち着くのをまっている。
でもこの抱擁は、僕が「愛おしい」からしているんじゃなくて、性感を高めるためのスパイスでしかない、所詮は衣津さんの抱き枕みたいなもの。……蚊帳の外みたいで悲しい。
だけど東條さんにしてみれば、相手は自分に集中しないで他の女とキスをしながら、手軽に挿入し、射精しているのだ。どっちの立場にしても悲しいことだ。
別に二人とも衣津さんに恋愛感情がないのが救いだけど。
「……んふぅ、……気持ち良かったなぁ、ここ一か月のあいだで、お、おぉ、……い、一番だったよ」
放出が終わったらしい。お風呂上りみたいな火照った満足顔。
「紗夕里くんのような美女を膣（なか）出しで征服しつつ、蒼くんみたいな背徳的な美少女に抱き付かれ、その尻を触りながらベロチューする。……たまらんなぁ」
「……」
「大丈夫、次は蒼くんの番だから……」
「……」
別に望んでないけど……。でも恥ずかしさなのか、何なのか……、無意識のうちに目を逸らし、キュッと衣津さんに抱き付いてしまった。
「ククク、……溜まり過ぎていた分を出して落ち着いたから、大好きな君をじっくり可愛がってあげるからね？」
「……」
そんなこと言ったって、僕が最初じゃなかったくせに……。
「ただその前に、ある程度回復させたいから、ちょっとした遊びをしながら休憩させてもらうよ」
衣津さんはそう言うと、僕の背中から手を離し、膣（なか）出しの余韻で脱力している東

條さんに、後ろから覆いかぶさった。

■　■　■

「……っ、……ぁ、なにっ？」
後ろから圧し掛かられ、困惑する東條さん。
衣津さんは彼女の肩に手を置いて、ゆったりとした動作でその上体を引き上げる。膝立ちの状態になると、気遣うような緩慢な動きで後方に腰を落とさせた。
――　クチュン……　――
「ひぃん！」
精液と愛液が混ざりあうような音、東條さんがあられもない声を出して顎を仰け反らせた。大人しく座ったとはいえ、膣（なか）に男性器が入ったままだったので、串刺しにされるような衝撃を感じたんだろう。イッた直後の敏感な状態なのに、酷い……。
「ふぅぅ、これだけ肉感的なのに身体は驚くほど軽い。そしてこの抱き心地と、チンポへの締め付け……、たまらん」
衣津さんは恍惚の表情でそう言いながら、正座の状態を崩し、挿入したまま器用に足を延ばして楽な体勢になる。一方の東條さんは正座を崩した女の子座りの状態を維持。
衣津さんの股間周辺を座布団代わりにするみたいにして座っている。
「蒼くん、紗夕里くんの正面に行きなさい」
「えっ、はい……」
言われた通りにする。
膝立ちのままベッドを移動して、東條さんの側面から正面へと向かう。
絶世の美女が、中年男性に為す術無く貫かれている姿を正面に捉える。
「蒼くん……、しばらく目を逸らさず彼女のことを見ていてあげなさい。彼女の蕩けた顔を優しく視姦してあげるんだ」
「……は、はぁ」
「紗夕里くんも目を逸らさないようにね」
「……」
僕は困惑して頷き、東條さんは悔しそうに無言を貫く。
「じゃあ頼むよ。私は少し休憩しながら紗夕里くんを愛でているから……」
衣津さんはそう言うと背後から東條さんを愛おしそうに抱きしめる。両手をクロスさせて、右手で左の胸、左手で右の胸……、と対称的に掴み、『この女性を完全に捕縛しています』みた

いな状態にする。
彼女のうなじに頬擦りしながら、胸に置いた手をいやらしく開閉させる。
――　モニュン、モニュン　――
見ているだけで心地良い弾力感が伝わってくる愛撫。側面から見る迫力も凄いけど、正面から見る迫力もまた凄い。それをメタボ中年男性に揉まれている美女の悲哀も凄い。
「おぉぉ……、おぉ、……た、たまらんっ」
東條さんの感触を全て吸収するように、恍惚の呻き声を上げながら胸を揉み、蠕動運動のように身体を小刻みに揺らす。
キシキシッという音が響く。
「んっ、……ぅ、……ぅぅ」
身体を雁字搦めにされ、連動するように揺れる東條さん。その振動によって彼女のお腹の奥深くまで突き刺さったアレが、快感を与えているんだろう。切ない声を漏らす。
「……」
僕はどうして良いか分からずに、ただ言われた通り東條さんの表情を見つめ続ける。
背中や肩に厭らしく頬擦りされ、無遠慮に胸を揉みしだかれ、身体全体を捕縛されている美女の姿。表情からは快感と嫌悪のない交ぜになった悲しげな色が読み取れる。
偏執的なストーカーに捕まって、弱みを握られて抵抗の手段を失った女性。
……そんな感じ。
蜘蛛の巣に絡まって生命力を失い、その身を儚く貪られていく美しい蝶。
……そんなイメージも沸き起こってくる。
――　クチュ……、クチュ……、クチュ……　――
衣津さんの前後運動に連なるように、水に濡れた生々しい音が響く。
大量の精液が膣（なか）で攪拌される音。膣壁に刷り込まれる音。
「おぉ……、おぉぉ、……ふぉぉ」
「ぁん……、ぁ、……ぁぁ」
苦悶に似た表情を浮かべながら、東條さんは悪夢の如きその状況を嘆くような、鼻に掛かった吐息を漏らす。
「ほぉぉ、……ぅぅぅ」
同じように鼻に掛かったような声……、だけど気色の悪さしか感じない衣津さんの声。
ただし凄く凄く気持ち良いのは伝わってくる。身体の前面を東條さんの綺麗な肢体、温かで柔らかな肌に包まれて……。
こんなの誰だって声が出るぐらい気持ち良いに決まってる。
だけど、反比例するように東條さんが可哀そうで仕方ない。こんな状況、彼女のご両親が知ったらどれだけ悲しむことか……。きっと優しいご両親のもとで育って、仲も良かったに違いな

い。こんな知的で凛とした雰囲気を身に着けてるんだから、健全で、幸福な人生を歩んできたんだと思う。
なのにまさか最終的に衣津さんみたいな卑怯な中年男性の慰みものになってるなんて……。
僕だってもし父さんにこんな契約のことが知られたら、どんなに悲しまれるか……。
想像しただけで震えが走ってしまう。
――　クチュ……、クチュ……、クチュ……　――
緩やかな前後運動は続いている。衣津さんの休憩を目的とした時間であり、そのうえで東條さんの感触を楽しみ、彼女自身を可愛がる時間。
だから彼女をイカせようという気はないらしい。まどろむような快感を堪能する時間のようだ。
「あぁ、紗夕里くぅん、……君は私のモノだ。この背中もうなじも、胸もマンコも太腿も……、すべて……、ふ、ぉぉぉ……、この身体は全て私の」
「い、いい加減にして。……そんな陰湿なこと言わないで。せめて普通にしなさいっ――」
気持ちの悪い物言いに対し、女教師のように毅然とした態度で叱責する東條さん。
でも当然そんなのは、なしのつぶてで……。
「紗夕里くぅん……、可愛いよぉ。……あぁ、可愛いっ。……蒼くん、見てくれ。私と紗夕里くんのラブラブっぷりを……。私が彼女を射止めて、存分に愛している姿をぉ、……ぉぉっ、マンコが反応してるっ」
「……」
な、何なのコレ？　……これが大人のやることなの？
「だ、だから、普通にっ……。……お、おねがい、……んっ、……っ、……見ないで」
羞恥に染まったような表情で、涙を滲ませながら僕を見て懇願する東條さん。ある種、馬鹿にされているような状況。ここまでされても何も出来ない無力な自分を第三者に見られてる。こんなの絶対に恥ずかしいはずだ。
ただ本人は気づいていないだろうけど、涙の滲んだ瞳は焦点が合っておらず、陶然とするように甘く蕩けている。
「お、お願い……、初美、さ……、ん」
「あっ、は、はい……」
すぐに眼を逸らそうとする――けど、彼女の背後にいる衣津さんと目があった。
「駄目だよ蒼くん……。ちゃんと紗夕里くんを見続けなさい」
拒絶を許さない態度。さっきまでの間抜けっぽい声色は一切感じられない。
きっと……、さっきの変態反応もプレイの一環なんだろう。東條さんを変なリアクションで辱めて、殊更に屈辱の快感を煽るため、必要なスパイスって感じで。
僕をイヤらしく虐めるのと同じ要領だ……。
「……は、はい」

でもそう理解したからと言って、逆らうことなんて出来ないから、僕は殊勝に頷くしかない。居たたまれない気持ちを抱えながら、東條さんを再度見つめる。
「……ごめんなさい」
一応、謝っておく。
「……いえ」
東條さんは首を横に振って許してくれた。
「蒼くん……、紗夕里くんにキスしてあげなさい。君も、この子を可愛がってみると良い」
「えっ……？」
予想外の言葉。
「恋人たちのレズキスは目とチンポの保養になるからね。存分に舌を絡ませ合うと良い」
「……」
不可解な命令。
こんな綺麗な人を独占している。その優越感に浸っていたはずなのに、僕にもそれを味わわせるなんて……。そんなの絶対に許さないと思っていた。
それとも僕は衣津さんの独占欲を刺激しないぐらい些細な存在なんだろうか。完全に自分の管理下に入っているから嫉妬する必要はなくて、飼ってるペット同士が目の前でじゃれ合っても怒る必要はない、ってことなのかな？
「ほら、早く二人の美しいベロチューを見せてくれ」
瞳の奥にマイナス感情を秘めているわけでもなく、衣津さんは朗らかに言って促す。
「わ、わかりました。……し、失礼します」
自由に動けるのは繋がっていない僕なので、不安と困惑を態度に出したまま、東條さんににじり寄る。
「あっ……、だ、だめっ、……やっ、……こないで」
僕の接近に対して、怯えたような声を出す東條さん。
「えっ……」
拒絶されてしまい凄まじいショックを受ける……。瞳は蕩けたように焦点を失い、抵抗の声にも甘さが含まれているけど、僕に発した言葉は完全なる拒絶。
衣津さんのことは受け入れてるのに、僕には「こないで」なんて……。
うぅぅ、凄いショックだよぉ……。
「っ、……ぅぅぅ」
少しぐらい好感を持ってくれていたかと思ったのに、実は嫌われてたんだ……。
情けないことに傷心があからさまに顔に出てしまった。瞳にジワっと涙が溢れ、視界が歪む。
「ご、ごめんなさい……、僕なんかで……」
誠心誠意、謝る。……でも、

「命令だから……」
気持ち悪いと思われていてもキスしないと。
「ぁっ、……ち、ちがっ、……そんなっ」
東條さんの視線が焦点を結び、理性の色が戻った。
「そ、そういう、わけじゃ――」
「ごめんなさい、……すぐ、終わらせますから、少しだけ我慢してください」
「ククク……、ちゃんとディープキスするんだよ？　すぐに唇を離さずに、私が興奮する程度には舌を絡ませ合いなさい」
「……」
傷心の奴隷にどこまで鞭を打つ気だろう。
だけどそういう命令だから、言う通りにしないと……。
「本当にごめんなさい、東條さん――」
「っ、……ちがっ、……私はっ」
嫌悪と戸惑いに満ちた表情で、東條さんが見つめてくる。これ以上の拒絶のリアクションは見たくなくて、僕は俯きがちにもう一度「ごめんなさい」と言ったあと顔を近づける。
見つめ合えば魂を奪われてしまいそうなほど美しい相貌。接触点である唇は肉感的で艶やかで……。傷心ながらも胸を昂ぶらせてしまう魔性の魅力を持っている。
この唇と触れ合ったら絶対に気持ちが良い。だけど東條さんは僕を嫌がっている。
……うぅ、切ない。
ある程度、受け入れられていたと想ってたのに……。自分が人に嫌悪されているって、こんなに辛いことだったんだ。傷が広がらないうちに早く済ませてしまおう。
「ぁっ、……っ」
無意識のうちの抵抗なのか、東條さんは震える手で僕の肩を掴んでくる。
そのまま押し返していこうと……？　そこまで僕のことを……？
本来なら肩に触れてくれて嬉しいはずなのに、今は悲しみしか感じない。やっぱりやめてあげた方が良いのかな……。でもキスをやめたら衣津さんが怒るし……。
だからごめんなさい、東條さん。
顔を傾けて唇を合わせるために上体を前に……。衣津さんは緩やかな前後運動を停止して、キスをしやすいようにしてくれる。
……距離が無くなる。
「「……んっ」」
ムニュン……、この世のものとは思えないぐらい、柔らかくて気持ちの良い感触が触れる。
ヌチュとしていて潤いに満ちた質感、その柔らかさ自体が甘さを伴っているような快感。
「「……」」

お互い無言のまま、感触を交換する。
さっき三人でやった時にも触れたけど、今回は一対一、正面からキスをしている。
プニュプニュした彼女の唇の感触を全面に味わう。衣津さんとのキスは不快さを強引に快感に変えられるけど、東條さんとのキスは、接触するだけで気持ち良くて、幸福感しか感じない。恋人でもないのにこんなことを思ってしまうのは、軽薄なのだろうか……。
「んっ、……ぅっ」
突如……、塞ぎあった唇のなかで、東條さんがくぐもった声を漏らす。
――ピクンっ……――
身体が震えて、僕の肩を掴む力が強くなる。キュゥゥって肌に指がめり込んでいく。
痛くはないけど感情がそこから伝わってくる。……この感情は。
「ククク……、蒼くんからのキスで軽い絶頂に達したか……。何やら相当気に入っているようだったからね。……殊のほか好みのタイプなのかい？　紗夕里くん？」
……えっ？
好みのタイプ？　……僕が？　思わずキスをやめて、東條さんを見つめる。
「まあ文句なしの美少女だからね……。君は来歴を知らないからアレだけど、かなり希少価値の高い子だ。無意識のうちにその魅力を察したのかな？」
「……」
「ただちゃんと蒼くんに弁明しないと可哀そうだろう？　紗夕里くんに拒絶されて傷ついているんだぞ？　だからちゃんと説明しなさい。この状態で貴方とキスをしたら、簡単にイッてしまうから近づかないで。貴方のことを好ましく想っていると知られてしまうのは恥ずかしい。変に思われてしまう。だからキスはやめて欲しい、そう正直に伝えないと」
「……っ」
東條さんは図星だったのか、その言葉を聞いて頬を赤く染めた。見る見るうちに耳まで赤くなっていく。……か、可愛い。
「えっ、……あっ、……ぼ、僕」
戸惑いとともに喜びが溢れる。東條さんみたいな人に好ましく思われてたなんて……。
凄く凄く嬉しい。嫌われたって思っていたから尚更……。
「ぁ、ぁ……」
表情が晴れていくのが自分でも分かるし、それが二人にもあからさまに伝わってると思う。
現金でチョロいヤツだって思われてるに違いない。
「ククク……」
「……っ」
衣津さんは楽しそうに笑い、僕の反応がますます羞恥心を煽ったのか、東條さんは耳まで真っ赤にして、動揺したように視線を斜めに逸らして……。

「ほら、早くキスを続けなさい。二人がキスをすると紗夕里マンコがピクピク反応するから、とても心地良いんだ。蒼くんに入れる前の良い余興になる」
「「……」」
そう言われて僕は東條さんを見つめ、東條さんは目を逸らし続ける。
「あ、あの……、ごめんなさい、失礼します」
「……」
僕が恐る恐る言うと、東條さんは無言のまま顔を上向けて、キスを許してくれるような体勢になる。僕は小さくお礼を言って、顔を近づける。
先ほどと同じように口づけを交わす。
ムニュ……、甘い弾力が唇に触れ、僕の心をときめかせた。
「「……んっ」」
お互い鼻に掛かった甘い声。……程なく唇のほとんどが接触する。こんな綺麗な人とキスをしている。僕なんか絶対に相手にされないだろう大人の女性がキスを許してくれる。
最低な環境だけど最高な状況。璃歌と美那香に対する浮気みたいで申し訳ないけど、僕だって本来は健全な男の子だから仕方ない……、よね？
「ぁっ、……んぅ、……むっ」
気が付けば彼女の口内に舌を入れてしまっていた。相手が来ないなら自分から行く……。それが衣津さんに躾けられたルールみたいなものだったから、つい無意識のうちに……。
自然に東條さんの唇を舐めて、こじ開けるようにして口内に侵入していた。
「っ……、んっ、……んんぅ」
驚きと困惑に満ちた声……。だけど拒絶しないで受け入れてくれる。
僕なんかを受け入れてくれて……、死ぬほど嬉しい。ありがとうございますと内心で伝えながら、興奮とともに涙を滲ませてしまう。
――レロ……、レロ……、ピチャ――
ふぁぁぁ、東條さんの口のなか、すごいよぉぉ……。
柔らかくて熱くてヌメヌメしてて、仄かな甘さが滲んでいて、それが味蕾を通じて快感へと変換されていく。こんなの、凄すぎて……。
――レロっ、……ピチュ、……レロレロ――
女性と舌を絡ませ合うのが、こんなに……。こんなに……。
これなら、ずっと……。永遠にしていたい。
衣津さんとのキスは僕が受け身で愉しまれている感じだけど、東條さんとの場合は僕が積極的に動いて気持ち良くなっている気がする。……はしたない。
「あむっ、……んっ、……ぅんぅ」
「っん、……んぅ、……ぅぅん」

――　ピチャ、……ピチャピチャ、レロ……　――

しかもそれに東條さんが応じてくれるものだから、僕の心は天にも昇るようで……。

情けない話だけど、この行為だけで東條さんのことが好きになってしまいそう。

……でも、こういう性的な快感を目的にしている男が多いから、東條さんはきっと冷静な性格になって、女の人が好きになったんだろう……。

自分が性的な魅力に溢れ過ぎて、それを狙われることが多かったから辟易して……。それを考えると自分の浅ましさを痛感して厭になる。僕もそういう厭らしい男と一緒だ。

「妬けてしまうほどアツアツだねぇ」

グニュングニュンと東條さんの胸を揉みながら、僕の心を見透かしたように衣津さんが言った。過度な好意を察して怒ったりしないかな……？

「だがそろそろ、蒼くんを可愛がろうかな。……二人とも、キスはもうやめなさい」

――　ペチャ……、レロレロ……、……　――

ゆっくりと唇を離す。……名残惜しさが半端ない。ずっと東條さんとキスしていたい。

「……」

東條さんも熱に浮かされたような表情で僕を見つめる。まるで愛しい恋人を見ているかのようで、それを受けて僕は全身が恋に溶かされてしまったかのように熱くなる。でもその視線は衣津さんのモノが膣（なか）を貫いているからかもしれない、僕の魅力とかではないかもしれない……。

「さぁ、蒼くん、ベッドに仰向けになって……」

「……あっ、は、はい」

彼女への想いを巡らす間もなく、次の指示が飛んできた。

後ろに下がって静かに倒れこみ、天井を見つめる。鏡張りになったそこに自分の姿が映る。初めての時に見た光景。そして改めて全裸であることも認識され、自然と胸を隠すように手を交差させてしまう。足も曲げて大事な部分を隠すようにする。

「うん、では次に両手を自分の膝の裏に入れて、抱えるようにして思い切り足を開きなさい」

「……えっ？」

瞬時には理解できず、戸惑いが浮かぶ。

「ほら、さっきソファーで足を開いていただろう？　あれを寝た状態でやればいい。そしてその状態を維持するために足を抱えるんだ」

「……」

戸惑いが徐々に晴れてくる。耳に入った言葉の意味が明らかになる。

「で、でも、……そんなっ」

「今さら恥ずかしがる関係でもないだろう？」

「で、でも……」

それは完全に身体を開くということで……。しかも酷く情けなく、あられもない姿で……。
「蒼くん」
穏やかな声。嗜めるような声。……それだけで僕の抵抗は封じられてしまう。
「あ、ぅぅ……」
顔に血液が集中する。だけど意識を奮い立たせて両膝を立て、その裏に腕を忍ばせて抱え上げるように……。
「ぅぅ、ぅ……、ぅぅ……」
足が割り開かれていく。局部が空気に触れてスースーする。
全てを曝け出す恥ずかしさ。解剖されるカエルのような状態。
「ククク……、可愛い格好だね」
衣津さんが嬉しそうに呟く。自分でやらせたくせにぃ……。
その言葉だけでも背筋がゾワゾワして、羞恥の震えが走る。このうえ更に……。
しかも天井の鏡に映る自分はあまりにも情けなくて……。視線を逸らすために横へ……。広々としたベッド、シーツの白、壁紙の白。他には……、他には……。
「紗夕里くんも可愛いと思わないかい？」
「……」
その問いかけには何も返ってこなかった。怖くて無言の意味を推し量れない。
「さぁ、美少女マンコを喰うか」
おもむろにそう言うと、衣津さんはモゾモゾと動いて東條さんと身体を離す。膝立ちの状態になって僕に近づき、照準を合わせる。
「うぅ……」
その動きを視界の端で見届けながら、挿入への恐怖と戦慄に心を揺さぶられる。だけどその感情の中には、打ち震えるような期待や悦びが確実に入っているのも自覚する。
やっぱり僕は男性とのエッチの快感に、ゆっくりと……。
「大好きな蒼マンコに三週間ぶりの帰還か」
しみじみと呟きながら、衣津さんは躊躇なく僕のそこに男性器をくっつけ――
「ひぅ……」
恐怖と歓喜に震える僕の意思など無視して、挿入していく。
――ズニュニュ……、ニュ……――
「くぅ、……ぁぁ、ぁぁぁぁ」
物凄い圧迫感が生じる。体内に異物が侵入してくる感覚。蕩けるような幸福感。まだ数えるほどしか受け入れていないはずなのに、すっかりと膣（なか）に馴染む男性のソレ。
「くぉぉぉ……、やはりこのヒダの感触と、甘い吸い付きはたまらんなぁ」
唸るように溜息を吐く。自分の存在を貪られているような感覚に陥り、背筋が屈辱で甘く痺

れていく。
「紗夕里くん、蒼くんの体勢が崩れないように足に手を添えていてあげなさい」
「……」
その言葉に従い、東條さんが僕の近くに移動し、足を押さえた。
「……ごめんなさい」
触れる際に謝ってくる。
僕は無様な姿を晒す情けなさに耐えながら、首を横に振る。
――ズニュニュニュニュ、……ジュニュニュニュニュ、……ズニュニュニュニュ――
「ぅぁぁぁぁ、……ぁぁぁぁぁ、……はぅぅぅぅ」
でも、そんな悲哀は、衣津さんの抽送の前に儚く霧散してしまう。逞しい亀頭が膣（なか）を甘く侵していき、太い棒の部分が膣（なか）の隙間をピッタリと埋めていく。
パズルのピースのようにみっちりとハマり、運命だったかのように束の間の邂逅を喜ぶ。
引き抜くときは、凶器みたいなカリの部分が、膣壁を刺激して愛液を掻き出し、魂を抜き出すような快感と喪失感を全身に広げていく。だけどすぐにまた挿入され、異物感と安心感が満たして……。
「はぅぅぅぅ、……すごいよぉぉぉ、……うぅぅぅぅぅ」
情けない声と弱音がポロポロ零れ、身体も溶けていくように痺れてしまう。
矜持を持って耐えるなんてことなんて出来ない。何よりも縋るよすがが無いのが辛い。シーツを掴んだり衣津さんに抱き付いたり出来ないから、我慢のしどころがなくて防御力はゼロに等しい。無意識に腕に力を入れれば自然と足を開くことに繋がって……。その無防備さが一層快感を引き立たせる。
「ぅぅんぅ！　ぅぅ！　ぅぁ、……ぁぁんっ！」
――ズチュン……、ズチュン……、ズチュン……――
緩やかなリズムで腰を動かす衣津さん。僕はただ従順に甘い声を漏らすだけ。
「紗夕里くん……、キス」
「……」
衣津さんの言葉に応じて、彼女の身体が動く。僕の足を押さえながら身体を前傾させてキスをする。
「「……んっ」」
二人の声が重なった。
衣津さんはさらに東條さんの豊満な胸に手を向けてグニュングニュンと揉む。
――ズチュン……、ズチュン……、ズチュン……――
もちろん僕に対する動きも忘れない。
「あんっ、……んっ、……ぅ、……あんっ」

……だけど。
初めての時や保健室でのエッチの時は、一対一で向き合って……。その大きな身体で掛布団みたいに覆いかぶさってきてくれたのに、今は片手間みたいに……。
さっきと同じで僕は衣津さんが気持ち良くなるための道具でしかない。唯一触れ合っているのは性器だけ。
「んっ、……ぅぅん！　……ぅっ！　……ぁっ！　……あんっ！」
それでも、その挿入は信じられないぐらい気持ち良くて、心が満たされるような快感が蓄積されていく。
おざなりに相手にされているだけなのに……。
「ぅぅん！　……イっ、……クっ、……ぅぅぅ！」
はしたなく絶頂に達して背を仰け反らせる。背筋を走る衝撃に耐えるため無意識のうちに膝裏から手を離してシーツを掴む。
「うっ！　……ぅぅ！　……っ！」
「おおおぉ……。良いねぇこの締まり」
嬉しそうな呟き。だけどすぐに東條さんとのキスを再開して、その胸を楽しそうに揉んでいる……。
「蒼くん、落ち着いたらまた足を抱えるんだよ？」
気軽な感じでそう言うと、彼女と舌を絡ませることに集中する。
「ぁぁ……、ぁ、……ぁぁ」
余韻に震え、茫洋とする意識の中で、その軽薄さに悲しみを覚える。だけど従わないといけないから、ゆっくりと膝を立ててその裏に手を伸ばす。
脱力している腕に力を入れ、何とか持ち上げる。
またひっくり返ったカエルみたいな体勢になって……。
――　ズ、……ニュニュニュ、……ジュニュニュニュ　――
抽送が開始される。
「あんっ、……ぅぅ、……ぅぅぅ！」
まだ高みから降り始めたばかりの僕に、その動きは辛い。これでフィニッシュみたいに激しくされたらもっと酷い嬌声をあげてしまう。
――　ペチャ……、レロレロ、……レロッ　――
だけど衣津さんは東條さんとのキスに夢中で、意識を向けてくれる様子はない。彼女の胸を気持ちよさそうに揉んで、甘く柔らかな舌を楽しんで……。
――　ズニュニュ……、ジュニュニュ……　――
僕は先端だけ繋がって一人蚊帳の外。男性器を気持ち良くさせる容れ物みたいな扱い。
……身体を捧げているんだから、せめて真摯に向かい合って欲しいって思う。

でも心は捧げていないから結局はどっちもどっち？　……そう、僕は心を捧げてはいないんだ。
だからこんな扱いでも……、平気。
――　ズチュン、ズチュン、ズチュン……　――
速めの動き……、間隔が狭まってくる。
「うん！　んんっ！　あんっ！　……ぅぅん！」
そのリズムの変化に、声のトーンが応じる。完全に屈服している声。
……恥ずかしい。誰にも聞かれたくない甘い声。今は僕だけが鳴いている状態だから尚更。東條さんに聞かれてしまって恥ずかしい。こんな男の人に媚びたような声。
視線を天井に向ければ、無様な格好で貫かれている僕の姿。足を抱え上げながら、お腹を溶かす固い棒の快感に翻弄される少女の痴態が映っている。
相手の動きに合わせて少しだけ身体を律動させ、表情を蕩けさせ……。
「おっ、……おおおお」
衣津さんが呻く。キスをやめて身体を動かす。僕に覆いかぶさるようないつもの体勢に移行する。
……あぁ、……やっと。
その気持ちが芽生える。
熱を持った巨体が圧し掛かり、汗ばんだ肌が、僕の胸やお腹を潰していく。
体毛がザラザラと僕の肌を擦りあげ、中年男性の体温と体臭が全身を包み込む。
生理的嫌悪と幸福感……。
足を抱えていた手を自然と衣津さんの肩に添える。開いた足はそのまま衣津さんの太ももに乗せ、投げ出すように……。
「は、……ぅぅぅ」
男の人の肉布団に包まれた僕の姿が……、鏡に映される。
これも、人に見られたくはない。家族には絶対見られたくない。
「紗夕里くん……、蒼くんの隣に寝なさい」
「……」
耳元で発せられる言葉。それに従う音が聞こえ、ベッドが波打ってシーツが擦れる音。衣津さんの顔が邪魔して状況は見えないけど、僕の隣に東條さんが横になって寝ている気配。
「もう少しこうだ。……そうそう。よし、それで良い」
モゾモゾ動きながら自分の体勢を整え、東條さんの体勢を整え……。
動き出す。
――　ズニュン、ズニュン、ズニュン　――
微妙に角度が変わった抽送が開始される。

「あっ、あっ、あっ……」
すぐに甘い声で僕は応える。
衣津さんは僕の膣（なか）を性器で打ち付けながら、身体を正対させることなく、東條さんの方に顔を傾けてキスを始める。
……こ、こんな状況でも、……僕を見てくれないで、……他人のところに。
「あっ、あっ、っ、……んっ」
それでもエッチな腰の動きは的確で……。僕は完膚なきまでに気持ち良くなってしまう。
胸毛とかお腹の毛とか、脂肪とか筋肉とか、汗とか熱とか体臭とか……。そういうのに包まれ侵される感覚が、僕をおかしくしてしまう。
「ぅん……、ぅっ、……うっ、……イッ！」
程なく、簡単に絶頂を迎えた。
――　ピチャ、……レロレロ、……レロピチャ　――
でも、それでも……、衣津さんは僕に意識を向けず、東條さんとのキスに夢中で……。
「あっ……、っ、……ぅ」
少しでも振り向いてほしくて、快感に耐えたくて、衣津さんの背中に手を回してキュッウ！っとしがみつく。腰に足を絡ませて余韻に震える。
――　レロレロ……、ピチャ、……ピチャピチャ　――
それでも衣津さんは気づいた様子もなく、キスを続けている。
……ぅぅ。
「っ、……ぅっ、……く、ぅぅ」
た、確かに東條さんとのキスは天にも昇るほど気持ちの良い行為だけど……、少しぐらい僕に注目してくれたって……。さっき、三週間ぶりにエッチが出来て堪らないって言ってたじゃん。可愛いって言ってくれたじゃん。
なのになんで……。
「……ぅぅ」
バカっ……。悲しくなって回していた手に力を入れ、爪を立てて僅かに背中を刺す。
痛くはないだろうけど、せめてもの意趣返しに――
「……」
不意に、キスをやめて衣津さんがこちらに顔を向けた。
「……あっ、……ご、ごめ、……な、さい」
怒られると察して身体が硬直。すぐに手を退ける。
「……ククク」
衣津さんは優しく微笑んだあと、僕の正面に身体を合わせ、耳元に口を寄せてキス。さらに頬を辿るようにキスを続けながら、最後は唇、そして舌を入れてきた。

「あっ、んっ……」
――レロレロ……、レロッ――
口内で舌が踊る。上あごの部分を撫でられて背筋が震える。
喜びが全身に満ちていく。
――ズチュ、ズチュ、ズチュ……――
そして腰の動きも再開される。
上と下から同時に……。身体も大きな肉に包まれて……。
全てが衣津さんに接している。
うぅ……、きっと僕の変な気持ちを察してこんな風に……。これじゃあ僕が嫉妬したのを慰めてくれたみたいじゃん。
恥ずかしい、情けない。……でも、……嬉しい。
「んっ、……ぅぅ、……ぅっ、……んちゅ」
ようやく僕に目を向けてくれた状況は、全てを貪られているような僅かな生理的嫌悪のなかに、圧倒的な安心感と幸福感があって……。ずっと身を委ねていたい気持ちにさせてしまう。
「うっ、……んっ、……んっ、……ぅぅぅぅ！」
しばらくすると大きな波が来て、大きな絶頂に晒される。
「衣津さんっ、……っ、あっ、……イキますっ、……うっ！　ぅぅぅぁぁぁ！」
キスをやめ、媚びるように衣津さんの身体にしがみついた。肌と肌が強く密着し、体温が溶け合って境界線が分からなくなる。
他者に捕食され、その身体のなかに消化されてしまうような感覚。
陶然とした悦びに包まれる。
「ぅ、ぁ……、ん、ぅぅ……」
ビクンビクン！　不随意な痙攣を繰り返しながら、情けない醜態をさらす。隣で見ている東條さんはどんな風に思っているんだろう？
「ふぅ……」
衣津さんが疲労を少しだけ滲ませたような息を吐いて身体を離した。密着していた部分が露出し、空気が触れてヒンヤリする。寂しさみたいなものも生じる。
「紗夕里くん……、蒼くんの上に乗りなさい。私に尻を向ける感じで。四つん這いの状態で」
そう指示を出したあと身体を離す。ニュチュンという音が下腹部から届いて、男性器が引き抜かれる。
「んっ……」
腰が少しだけ跳ねた。
衣津さんはちょっと距離を取って、視線を僕の隣に向ける。こっちを見つめていた東條さんは、僅かに上気した表情を浮かべたまま身体を起こし、言われた通りに動く。

「……ごめんなさい」
跨ることに心苦しさを感じたのか、謝罪してくれた。
……全然、そんな必要なんてないのに。僕は首を振って応える。
東條さんは少しの照れを含んだように頷いたあと、四つん這いの状態になる。まるで僕を押し倒すような体勢。……凄い迫力。一瞬だけ胸元に目がいってしまう。
「っ……」
それに気づいて恥ずかしそうな東條さん。僕は慌てて目線を明後日の方向に逸らす。
下心を目の前で見られてしまった。……ごめんなさい。……でも凄かった。
張りのある胸がすぐそばに。そしてこの体勢、この視界で捉える胸のなんとエッチなことか。
「んっ……」
東條さんが顔をしかめた。
「くっ、ぅぅぅぅぅ」
そして、甘くか細い声をあげる。……挿入されているみたいだ。
……もう攻守交替になってしまった。やっぱり僕よりも東條さんのほうが。
「んっ、……ぅんっ、……んっ、……んんっ」
――パン、パン、パン、パン――
小気味良い音が響き、東條さんの身体が揺れる。真下からその光景を見ているから、張りのある豊満な胸がブルン、ブルンっ、って感じで揺れている。
す、凄すぎる。……こんなの、エッチ過ぎる。
僕のはプルプルって感じだけど、東條さんのはブルンブルンって……。目に焼き付いて一生離れないかも。
「ぅっ、……っ、……っ」
目を固く閉じて、歯をきつく食いしばって声を漏らすまいと頑張る東條さん。僕が真下で見てるから、尚更平常心を心掛けようと必死。
自然と片手を口元に持ってきて、指を噛むような仕草をする。
――パン、パン、パン、パン――
だけどそうすることで体勢が不安定になる。
両膝、片手だけでは、腰を連続で打ち付けられる衝撃には耐えられない。
すぐに前のめりに崩れ落ち、対になるような形で僕と身体を重ね、密着した。
「「んっ……」」
……う、うわぁぁぁぁ。
す、凄いっ。東條さんの身体、超気持ち良いっ。
僕に圧し掛かる形で密着。柔らかくてスベスベな身体で包んでくる。
これが女性の身体。そして重み。

衣津さんの脂肪の柔らかさや筋肉の圧迫感とは違う。みずみずしくて張りがあるのに、底なしに柔らかいというか……。「慈愛」とか「母性」が感触に変換されているみたいな。
体温や重みすらも、たおやかで優しい。
立った状態で抱き合った時も気持ち良かったけど、上から圧し掛かられたときの気持ち良さはそれ以上。……ずっとこうしていたい。
どうせ衣津さんなんて僕のこと放っておくんだから、こうやって東條さんに抱きしめられて、もしくは抱きしめていたい。ずっとずっとこの人と……。
――　パン、パン、パン、パン　――
「っ、うっ……、あっ、……あっ、……っ、……ごめっ、……なさいっ」
東條さんは僕を下敷きにしてしまったことに狼狽し、慌てて起き上がろうとする。だけど骨抜きにされている状態じゃ力は出ないし、バランスは取れない。
「あっ、き、気にしないで下さい、僕は平気ですからっ。東條さんの楽な体勢でいてください」
それが本心であると伝えようと、勇気を出して僕は彼女の肩を、肩甲骨の辺りを撫でた。
「んっ……、ぁ」
その刺激は快感に変換されたらしい。
――　パン、パン、パン、パン　――
「んっ、ぅぅん！　っ、……ぁっ！」
さらに身体が前後に律動する。彼女のその動きによって僕たちの胸は潰れあってグニュングニュンと……。この間に手を入れたら絶対に気持ち良い。この世のモノとは思えない感触がするだろう。それぐらい柔らかくぶつかり合っている。
「あ、ありがとっ、……っ」
苦悶に喘ぐなかで、不意に耳元で囁かれた。
……と、東條さんに感謝された！　嬉しい！
「そっ、それに、衣津さんはエッチが上手い人だから、声を出しちゃうのも仕方ないと思いますっ。だから気にしないで……。ぼ、僕もたくさんエッチな声を出してるしっ」
慰めるように、媚びるように、東條さんに語り掛ける。
自分の痴態を自虐にしてでも東條さんに気に入られたい。嫌いに思われるなんて絶対にイヤだ。だからせめて少しでも好ましく思って欲しい。
どうしようもない浅はかさを自覚する。
「せ、せめて僕たちはそういうのに気を使わないで、普通にすれば……」
――　パン、パン、パン、パン　――
「うっ、……んっ、……っ、……んっ」
前後に揺れながら、声を漏らし……。僕にしがみつくようにして……。
「そ、そうね……、こんな奴に弄ばれて感じるのは、癪だから耐えたいけど……。それは無理

だって、散々教え込まれて……」
――　パン、パン、パン、パン　――
「おあっ……、っ、……耐えることは、この人を悦ばせるだけで……、……っ、……んっ――」
「相談は終わったかい？」
衣津さんが語り掛けてきた。そして身じろぎをして体勢を変え、挿入の角度を調整するようにして……。
――　ズニュン、ズニュン、ズニュン、ズニュン　――
四股を踏むような体勢で、上から突きおろすような、突き削って行くような動きをする。
「ひぅ!?　……ちょ、ちょっとっ、待っ、っ、ぁん！　……それっ！　だ、めっ！　……ぁっ、……あんっ！」
「我慢しなくて良くなったのなら、遠慮なく、鳴くと良い」
――　ズニュン、ズニュン、ズニュン　――
「あんっ、んっ、っ、……ぅ、ぁ、……待っ、……あんっ！」
あられもない嬌声が耳元で聞こえてくる。……とても綺麗で可愛い声。
東條さんの弱点を擦られてるのか。
「あっ、だ、ダメっ、……こんなのっ、またっ！」
「イクときはイクって言うんだよ？　……これからは丁寧に、イキます、と言いなさい」
足元で楽しそうに囁いてくる。
「ぅっ、……んっ、……やっ、あっ……、ダメっ、……イクっ」
「イキます、……だろ？」
有無を言わせない言葉。……それが引き金になったのか。
「あっ、……い、イクっ、……イッ、……イキますっ、……イクっ！」
東條さんは従順に身体を戦慄かせて絶頂に至る
無理やり丁寧な言葉を言わされ……。嘲るような意味が込められているのに、従わざるを得なくて……。きっと凄い屈辱だと思う。そしてそれが快感に変換されてしまう。
「うっ、……っ、……イクッ　んっ！　……んっ！」
腰をビクビクと痙攣させる。東條さんは僕に挿入して抽送しているみたいに上下にクイックイッっと腰を波打たせ、快感の凄まじさを表現する。
さらに僕に強く抱き付いてギュゥゥゥって……。
「はぅぅぅ……」
昇天してしまうほどの気持ち良さと、求められることの喜びに僕自身も包まれる。
東條さんとの抱擁はこんなにも気持ち良くて……。どうせなら東條さんが僕と契約して欲しかったな。それだったら天にも昇るぐらい嬉しかったのに……。
「ぅんっ」

僕の身体の上で今一度の痙攣が起きる。程なく足元で身じろぎの音が聞こえ、体勢を色々と調整されて……。

……次は僕に挿入（い）れる番だった。

「う、……ぁぁぁぁぁぁぁ」

本日二回目の挿入。……ニュプリと難なく入っていく。

「ぁっ、……ぁぁ、……ぁ」

安心感と幸福感が舞い戻る。しかも今は絶世の美女である東條さんが僕を包み込んでくれて……。凄い幸福感、……多幸感（？）に満ちている。

「美女と美少女のマンコサンド味比べ……。良いなぁ」

――　ズチュ、ズチュ、ズチュ……　――

身体の奥、深層は衣津さんに浸食され、表層は東條さんの肢体に包まれて……。

こんな……、凄い……。

「うん、……ぅっ、……ぁっ、……あんっ」

声が否応なしに漏れる。自分から気にしないよう言ったんだから、無理に耐えたりしなくても良いはず……。どっちにしろ声は勝手に漏れる。

それはすぐ近くにある東條さんの耳に……。細大漏らさず伝わるだろう。

無意識のうちに彼女の背中に回している手の力が強くなる。……東條さんが僕を強く抱き返してくれたっ。

次第にその優しさと、下半身から来る痺れで性感が昂ぶり、あっと言う間に絶頂へと至る。だけど僕の時には特に指示はなくて、果てたのをおざなりに確認すると、東條さんへの挿入を再開する。

そして東條さんの場合は執拗にイジメて、最後に「イキますっ！」って無理やり言わせて……。僕の時は優しさと慈しみを装っているけど、とても淡泊な扱い。

東條さんとは挿入のときも、それ以外の時も常に繋がりを持っているように見える。

当然とはいえ、明確な差をつけられているのが凄く悲しい。

他の体位に移ってもそれは変わらずで、最終的には膣（なか）出しさえ一回もされなかった。それはそれで有難いけど、心に生じたわだかまりは消えず、燻ったまま。

自分の価値があくまでも相対的なもので、しかも酷く低いものであるということを、実感させられてしまった。

■　■　■

「ふぅ……、やっと人心地ついたなぁ……」
満足げな言葉とともに煙を深く吐き出す。ベッドに腰掛けて、美味しそうに煙草を吸っている。その身体からは、すでに汗は引いているみたいで、性交の残滓は後ろ姿からは窺い知れない。
「う、……うう」
「っ、……ぁっ、……んっ」
一方の僕たちは、その残滓を強く残している。どちらから洩れているか分からない、残り火のような嬌声を漏らしつつ、時より快感の余韻で身体を痙攣させている。
全身、汗やら愛液やら精液やら……。それは僕のものなのか、東條さんのものなのか、衣津さんのものなのか……。ぱっと見では判然としないほど混然一体となって、こびりついている。
「んっ……、っ」
活動を停止したうえに、汗の気化熱のせいもあって寒くなる。室温が高めに調整されていたみたいだから、歯が鳴るような寒さはないけど、快適な温度ではない。
……無意識のうちに、東條さんの方へ身を寄せる。
「……んっ」
彼女も同じように寒さを感じていたのか、身じろぎして受け入れてくれた。
この数時間（？）のエッチを戦い抜いた僕らは、自然と心の距離を縮められたようだ。恥ずかしいところをたくさん見られ、恥ずかしい声をたくさん聞かせあい、肌を重ねて一緒にイカされて……。初対面の人とこんなことになるなんて、普通は無い。
だからこそ、初対面にも関わらず、強い親近感が芽生えていた。
戦友みたいな感じ……？
「とても楽しませてもらったよ。あとは夜までいったん休憩しよう」
衣津さんは僕らが身を寄せ合っているのを見て苦笑しながら言った。
「さぁ、そんな体液だらけじゃ仮眠もとれないだろ？　一緒に入浴しに行こう」
……仮眠？　これから仮眠するの？
確かに何回もイって凄く疲れてるけど……。っていうか、今何時？
壁に掛かっている時計を見る……、四時五十分近く。二時間ぐらいここでエッチをしてたのか。……そりゃあ汗だくにもなるよ。
しかも大きな身体の、凄く性欲の強い人が相手だったんだから。
「さぁ、行くよ」
促すような声。僕はゆっくりと起き上がり、ベッドから降りる。東條さんも同じく起き上がってベッドを降りる。二人で前を歩き始める衣津さんのあとをついていく。
リビングに入ると、ルルシアさんがケーキを食べながらテレビを見ていた。とても幸福そうな表情。僕たちと眼が合うと「お疲れ様です」と微笑を浮かべて頭を下げてきた。

その笑みは、僕たちの情けない姿を見て浮かんだものなのか、ケーキが美味しいから浮かんだものなのか……。

見極める間もなく衣津さんが進んでしまったので、後を追う。リビングを出て別の部屋へ……。脱衣所みたいな場所、清潔な匂い、洗剤が揮発したような爽やかな匂いで満ちている。

着替えや着衣を入れるカゴ棚があったけど、そこに置く物を何も身に着けていないので、真っ直ぐ衣津さんの背中を追う。

ドアをスライドさせて中に入ると、湯気が全身を包んだ。

清廉で濃厚な木の匂いを滲ませる熱気。

すでに浴槽にはお湯が溜まっているらしい。24時間入れるようになってるのか、それともルルシアさんが前もって準備していたのか……。

浴室はかなりの広さで、普通の家のリビングを軽く超える大きさ。バスタブも十人ぐらいが余裕で入れそうな長方形のモノで、全体的に木で出来ていて和風な高級感にあふれている。浴槽の壁側には鹿威しみたいな竹の筒が生えていて、そこから心地よい音を立ててお湯が流れ落ちている。

こんなお風呂、テレビの豪邸拝見番組でしか見たことがない。ライオンの口からお湯が出る家、みたいな……。ここは竹の筒だから更に趣があって格好良い。

ふと、浴槽以外の洗い場を見ると、奥の方に何故か長方形のゴムボートみたいなのが立てかけてあった。……和風な浴室に場違いな代物。何に使うんだろう？

「さぁ、軽く汗を流してから湯船に入ろうか」

衣津さんはそう言うと、シャワーのところに行ってお湯を出した。

「蒼くん、来なさい」

僕に目を合わせて促す。

「は、はい……」

東條さんより先に呼ばれたことに驚き、少しの喜びを感じながら前に出る。衣津さんの大きな身体の前に立つと、早速、シャワーのお湯を手に掛けられた。

「お湯の温度はどうだい？　熱い？　冷たい？」

慎重に確認してくれてるらしい。こういうさり気ない優しさが大人だ。

「はい、……大丈夫です。ちょうど良いです」

「そうか、では洗うよ」

シャワーで全身を軽く流していく。冷え始めていた身体にちょうど良い温度。それを察してくれているのか、肩の部分にお湯を少し長めに当ててくれる。

それから背中に水流を当てて、お尻に当てて……。

「んっ……」

愛撫の余韻が残っているから、くすぐったいような気持ち良いような……。

しかも他人にお湯を当てられると、いつもとは違う感覚で……。
次は胸の方へ移動して、お腹から股間、太ももから足へと流れていく。
「では次は紗夕里くんの番だ……」
概ね洗い流された感覚があったので、僕は身を引いて場所を譲る。そこに東條さんは無言で入ってくる。そして僕の時と同じような手順で身体を洗い流されていく。
最後に衣津さんが自らの身体にお湯を当て、手で軽く全身をまさぐって汚れを落とす。
お湯を止めて浴槽に向かう。乳白色の湯船、入浴剤の爽やかな匂いと、浴槽の濃密な木の匂い。お金持ちのお風呂だから、檜だったりするのかな？
――　バチャン　――
衣津さんが先だってお湯に入った。後ろから改めて見ると背中が凄く広くて……、足を上げている姿、そのお尻の大きさに驚く。こんな人にさっきベッドで圧し掛かられていたのか……。耕也の大きいけど引き締まった身体とは違う、横に広い身体。
「二人も早く入りなさい」
奥の方の壁際まで行った衣津さんが、こちらを振り返る。
タオルも何もないから、何も隠せない状態。今さらだけど少しの恥ずかしさを感じながら小さく足を上げ、湯船に爪先を入れる。
少し温（ぬる）めの温度。寒くはならないけど、身体の芯まで温まるには結構な時間が掛かりそう。でもおかげで覚悟を決めなくてもスイスイと沈んでいけるので、身体を隠すという意味合いもあって、すぐに肩までお湯につかった。東條さんも同じ気持ちだったのか、素早くお湯に沈んだ。
そして示し合わせたように衣津さんの対面に並んで座る。
不思議なチームワークと言うか、シンクロニシティが芽生えているようで、凄く嬉しい。
「ククク……、嫌われたものだな」
愛人二人が距離を置いて警戒するように腰を落ち着かせるのを見て、苦笑する。
「アレだけ可愛がってあげているのに、まだ懐かないのかな？」
僕たちに向かって笑顔で語り掛ける。
「「……」」
なんて言って良いのか分からなくて、僕は無言で俯く。
東條さんも目線を明後日の方向に向けて無視している。
「まあ、そのうち自分から来てくれるようになるか」
本当にそんな風に変わってしまうんだろうか……。想像は出来ないけど、百戦錬磨の衣津さんが言うことだから、いつか僕は懐いた愛犬みたいに……。
「だがせっかく三人で入っているんだ。こうして一人でいるのは寂しいから、こっちに来てくれるかい？　私を挟むようにして座ってくれ」

両腕を浴槽の縁に乗せた王様スタイルで、僕たちを呼ぶ。
愛人に拒否する権限などないので、湯につかったまま近づき、その隣に座る。
待ち構えていたように片腕が僕の肩に乗り、手の平が胸を揉みしだく。
「んっ……」
さっきまで散々揉んでいたのに、まだ揉み足りないの？
横を見れば東條さんも眉根を寄せている。濁った湯船が邪魔をして、どう触られているのかは分からないけど、きっと同じことをされているんだろう。
――ムニュン……、モミモミ――
手の平で優しく形を変えられる。……マッサージするように、弾力を楽しむように胸の形を変えていく。指先で乳首を爪弾くようにして、上下にクニュクニュと擦る。
「ぅっ、ん……」
東條さんと同時に声が漏れた。
「ククク……、すっかり仲が良くなったね」
楽しそうに言う。自分がそういう風にさせているくせに……。
「ふぅ〜〜〜っ、……極楽極楽」
大きく息を吐いて背中を壁に預ける。本当にリラックスして弛緩しきったような声。それでも胸を揉むのはやめないところが衣津さんらしい。
ぞんざいな形で、リラックスするための補助の役みたいな感じで、僕たちの胸を揉んでいる。
「ここのところ仕事が忙しく睡眠もろくに取れてないし、ストレスも溜まっていたから、お気に入りの二人とこうして風呂に入れるのは最高だよ」
そんな疲れている状態なのに、あれだけ凄いエッチが出来るなんて、どれだけ体力があるんだろう。しかも今はまだ夕方で、夜中にもきっとたくさん……。
「さっきのセックスの余韻に浸りながら、お湯で疲労を溶かす。……しばらくはこの状態で居ような」
「……」
「……」
衣津さんがそう言うなら、僕らはそれに従うだけ。静かに頷く。
東條さんも無言で肯定の意を示す。
相変わらず胸を揉んだり、脇腹をさすったり……。自分にとって好ましい感触を味わいながら、身体を弛緩させてお湯の心地良さを楽しんでいる。
僕自身も大きな手のひらで優しく愛撫され、温かで柔らかなお湯に包まれ……。濃厚な木の匂い、竹の筒から零れ落ちる、ささやかなお湯の音などで凄くリラックスした雰囲気になっていく。さっきまでの狂おしい快感が、全身の隅々にまで甘く溶け、細胞の奥にまで染み込んでいくような感覚に包まれる。

このままずっと、このお湯の中にたゆたうようにつかっていたい。
そんな気にさせられてしまった。